わが里に 大雪降れり
大原の 古りにし里に 降らまくは後

天武天皇（巻二・一〇三）

やまと 万葉がたり

本歌の題詞には、「天皇の藤原夫人に賜へる御歌一首」とあります。「天皇」は天武天皇、「藤原夫人」は藤原五百重娘を指します。「夫人」は天皇の妻で、皇后・妃につぐ地位です。

五百重娘は鎌足の子で、天武天皇との間に新田部皇子を産んでいます。天武天皇の崩御後は異母兄の不比等の妻となり、麻呂を産みます。

「わが里」は天武天皇の皇居である飛鳥浄御原宮（現明日香村岡）のことを指します。一方、「大原」（現明日香村小原）は、鎌足の誕生した場所との伝承が残る、藤原氏の本拠地です。本歌が詠まれた時、五百重娘は大原におり、天皇とは別居していたと考えられます。

浄御原宮と大原は、直線距離で1キロメートルほどしか離れていません。そのため、実際の降雪量は大差なく、降り始める時間もあまり差はないでしょう。つまり、天皇はこれらのことを踏まえたうえで、五百重娘に歌を送っているのです。からかうようなユーモアを交えた歌だといえます。

本歌に対して、五百重娘は「わが丘の龍に言ひて 降らしめし 雪のくだけし そこに散りけむ」（わたしのいる丘の龍神に言いつけて降らせた雪のかけらが、そちらにちらついたのでしょう。巻二・一〇四）と返しています。

「わが丘」は大原のこと、「龍」は大原に祀られていた龍神です。この龍神が大原に雪を降らせているので、浄御原宮にも雪が降っているのだと詠んでいます。大原の方が見事な雪であるとの意味が含まれています。

同居しておらずとも、雪の降る情景を共有し、機知に富んだ和歌で楽しむ夫婦の仲がうかがわれます。

≪訳≫私のいる里には大雪が降っている。大原の古びた里に降るのは、もっとあとだろう。

（県立万葉文化館主任研究員・中本和）

やまと万葉がたり

大宮の　内にも外にも　光るまで　降れる白雪　見れど飽かぬかも

大伴家持（巻十七・三九二六）

本歌は、天平18（746）年正月のある日に、元正太上天皇の御在所で詠まれた5首の歌（巻十七・三九二二～三九二六）の一つです。

三九二二番歌の題詞によると、この日は大雪が降り、数寸（1寸は約3㌢）の積雪がありました。そのため、左大臣の橘諸兄が王卿を率いて、太上天皇の御在所へ雪掻きに参上します。その後の宴で、太上天皇が、雪を題として各々が歌を奏上せよと命じました。

そこで家持は、雪の光が大宮の内も外も照らしている様子を詠みます。大宮は平城宮を指すと考えられ、太上天皇の御在所は平城宮内の中宮の西院にありました。すなわち、大宮を讃えることで、天皇ならびに太上天皇の威光が内外に及んでいることを詠んだと考えられます。

前年5月、聖武天皇は紫香楽宮から平城京に還都しました。5年ぶりに、正月を故郷である平城京で迎えることになった家持の気持ちは、どのようなものだったのでしょうか。

家持は自身の歌を5首の末尾に置くことで、一群としてまとめています。本歌の左注には、宴で歌を詠んだにもかかわらず、『万葉集』に収載されなかった藤原豊成以下の18人の名前を列記します。収められたのは、諸兄と家持を含む5首のみです。家持は、その場で歌を記録しなかったために、歌が分からなくなり、収載しなかったと記します。収載された5首は記憶に残っていることから、歌の巧拙によったのでしょうか。

それでも左注に名前を記載したのは、宴に参加することの政治的な意味合いを家持が意識していたことをうかがわせます。

（県立万葉文化館主任研究員・中本和）

≪訳≫大宮の内にも、外にも、輝くほどに降った白雪は見飽きないことよ。